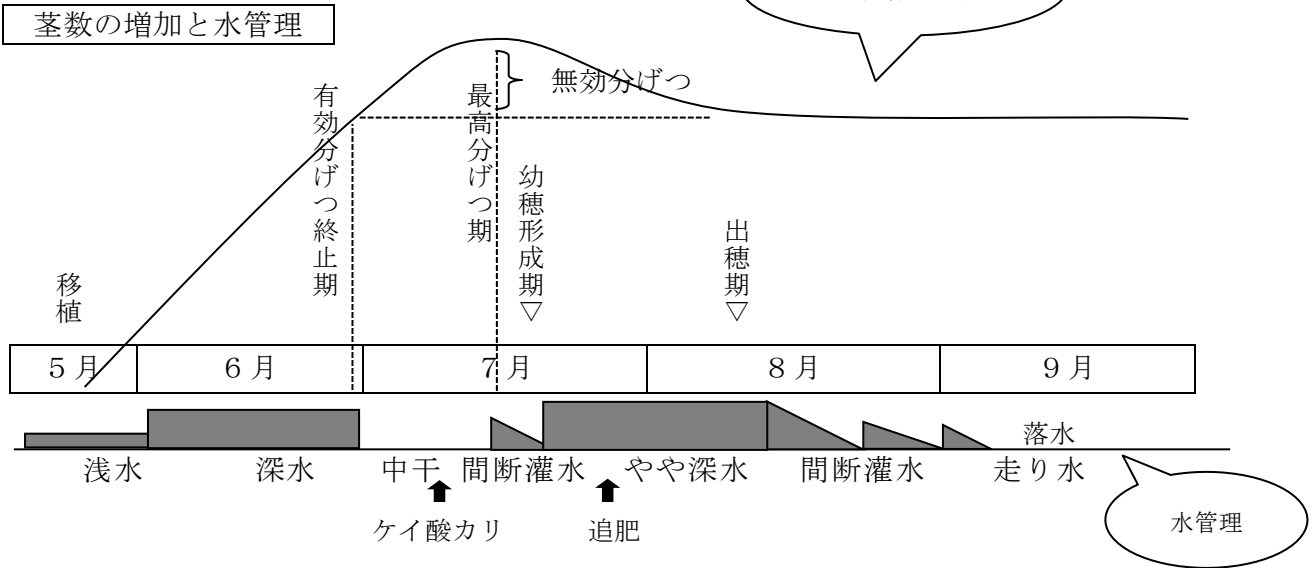


作物

1 水稻



各地域、幼穂形成期～穂ばらみ期を迎えている時期かと思えます。幼穂形成期以降は、穂の充実に係る重要な時期です。

～ここからの管理のポイント～

(1) 幼穂形成期から出穂期にかけてはやや深水

株元を保温することにより、花粉の数が増え不稔を少なくする効果があります。

幼穂形成期の水分不足は、もみ数が減少する、穂が短くなるなど、悪影響が心配されます。また、この時期に低温（気温17度以下）に遭うと、花粉の分化・発達がうまく行かず、奇形や不稔となります。深水管理で幼穂を守りましょう。

(2) 出穂期から登熟期は間断灌水

出穂から登熟期間は稲の生育期間で最も水を必要とします。ただし、出穂期以降は新しい根が発生しないので、それまでに伸びた根で成熟期を乗り越えなければなりません。今ある根を弱らせず、かつ登熟を促すために、登熟期間は「自然に水が引けて田面が出たら、再び入水を繰り返す」間断灌水に切り替えます。

玄米は受精後、最初の5日間で長さが決まり、その後～20日で幅が決まり、20日以降に厚さが決まり、概ね30日かけて肥大充実します。登熟期間全体にかけて土壤が乾燥すると、登熟歩合の低下、充実不良をまねきます。また登熟後半の乾燥は立毛中での胴割米発生を助長し、品質が損なわれるリスクも負っています。最近の研究では出穂後5～14日まで、玄米の幅が決定される時期に高温に遭遇すると、玄米が品質低下しやすくなることがわかっています。

高温条件下で登熟が進むと、胴割米や白未熟米の発生につながり、検査等級が下がる原因となるほか、食味や精米歩留まりも悪化します。水がかけられる地域で、高温登熟障害が心配される場合は、出穂期以降10日間～2週間程度のかけ流しを行う等、地温を低下させるよう、対策に努めましょう。

少なくとも出穂後30日までは水管理に気を配り、完全落水はそれ以降とすることが大切です。

◎落水は早すぎると稔実不良・胴割米の原因になります。

早生種は、出穂後30～35日（あきたこまち等）

中生種は、出穂後30～40日（コシヒカリ等）

落水後収穫まで期間があるのに土がカラカラに乾いてしまった場合は、走り水を行って土壤水分が極端に低下しないようにしましょう。

◎ご自身の出穂期をご存知でしょうか？

田植え日、育苗様式、ほ場の条件などにより出穂期はほ場ごとに異なります。来年度への参考とするためにも、ほ場ごとの出穂期を知っておきましょう。

※出穂期とは～・・・

出穂とは、「穂先が葉鞘から現れること」を言います。

出穂期とは、「全莖数の50%が出穂した日」のことを言います。

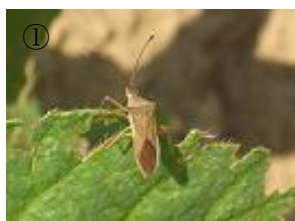
2 大豆

(1) 病害虫防除

大豆は播種時期や品種により異なりますが、概ね7月末～8月中旬にかけて開花期となります。開花後は莢ができ、実が肥大していく時期となります。この時期からマメシクイガなどの莢実害虫防除が重要となります。また、成熟1か月前から成熟期にかけて天候が高温多湿で経過すると紫斑病の発生も多くなりますので防除が必要です。

☆ 莢実害虫の防除

マメシクイガ、カメムシ類など莢実害虫の防除するためには、開花終期（8月中下旬）と子実肥大期（9月上中旬）に薬剤散布をします。このとき薬剤が莢によく付着するように散布します。粒剤を使用する場合には、粒剤はガス化して効果を示すため、湿害などにより大豆の葉がよく茂っていないと効果が劣ります。



写真①
ホソハリカメムシ

写真②
ブチヒゲカメムシ

写真③
カメムシ類による
吸害粒

☆ 紫斑病の防除

ほ場での防除適期は開花終期～莢伸長初期で莢実害虫防除の1回目とあわせて行います。紫斑病は生育中の拡大はほとんどなく、成熟すると急激に拡大します。また、収穫が遅れて畑に長く放置したもののほど発病が多くなります。成熟後は速やかに刈り取り、風通しをよくして乾燥するように心がけましょう。



紫斑病の被害粒。
種子伝染性病害なので無病種子を播種する

注意! 農薬散布について

- ・農薬の散布時は周辺の作物に飛散しないよう注意してください。
- ・特に飛散しやすい粉剤では早朝などの無風時に散布するなど注意し、風を利用した流し散布は液剤も含め絶対に行わないでください。
- ・農薬散布時に飛散の少ない剤型（液剤・粒剤）や飛散軽減ノズル利用も検討しましょう。
- ・農薬の使用にあたっては、ラベルに記載のある注意事項に従ってください。またみつばちに対して殺虫力が高い薬剤には「みつばち注意マーク」が記載されています。

「みつばち注意マーク」



ミツバチに対して毒性が強いためミツバチ及び巣箱に絶対にかからないよう散布前に養蜂業者等と安全対策を十分協議する。